

正長、康正、寛正、文正、永正等の號、五度に及びしかど、その程に滅び給ひしにはあらず、すべて本朝の年號始りしより此がた、其代々の事を細かに論じて、其事彼事不祥なりなど申さば、何れの字にか不祥の事のなからざらむ、其故は、改元といふ事、和漢ともに、多くは天變、地妖、水旱、疾疫等によらざるはあらず、されば古より年號に用ひしほどの字一字として、不祥の事に逢ふ事なかりしといふものはあらず、若必不祥の事、年號の字の致す所ならん事を患へば、古の代の時の如く年號といふもの、なからんには、まじきにや、されど和漢ともに、年號といふものなかりし古の時にも、天下の治亂、人壽の長短、世として是なきにもあらず、某意多禮亞、喝蘭他亞等之人に逢ひて、當時蠻國の事ども具に聞しに、年號を用る國々わづかに二三に過ず、其餘は皆年號といふ事はなくして、天地開闢より、幾千幾百幾十年など申す也、されど二十餘年の先より、西洋歐羅巴の國々、多くは其君死して、それが世繼の事によりて亂し國すくなからず、ごその冬、是年のはるも、多く戦ひ死せしなど申す也、是らは又いかなる事のため、りぬるによりてかくはあるにや、さらば年號なしとも、天運のおとろへ、人事の失ふ所あれば、亂れ亡びざる事を得難しとば見へたり、又異朝代々に同じ年號を用ひし事、彼は興り、是は亡びしも、又少なからず、たとへば永樂の號は、初め五代の時に張遇賢といひし蠻賊、中天大國王など稱して、其元を永樂とせしが、ほどなく亡びぬ、其後宋の代に及て、方臘と云ひしが、帝を稱して永樂の號を用ひしに、わづかに八月にして亡びぬ、其後又大明の太宗即位の後、永樂の號を用ひられしに、廿六年の寶祚を目出度し給ひき、是等の類悉くにかぞふるにいとまあらず、また本朝の號、異朝と同じきいくらもあり、たとへば建武の號は、後漢の光武、漢室を中興し給ひて、三十一年迄おわしましき、後醍醐院是を用給ひしかども、二年にも及ばずして天下亂ぬ、天曆は村上天皇の號にして、本朝の目出度代のためしには申傳へし所なれども、元の文宗の時、此號を用ひられしに、わづかに五年にして崩せられ